

heisei16

六花

Rikukwa haikukai

2

晦日そば kuragari ni negi hiitekishi misoka soba
初景色 umi wo ume yama wo kezurit e hatsugesiki
如月 kisaragi ya kaseki ni narishi sakana kana
蝶 une tsukuru saki he saki he to haru no cho
凧 ohdako no orikite kusa no iro to naru
夕桜 hahani yu wo tsukahasini yuku yuuzakura
盆の月 bon no tsuki haha no ko to shite furo wo taku
暑 raomen to ihujiga atsushi tenmabashi
メロン ami nadoni tojikomori iru melon kana
暑さ kono atsusa jazz ni arrange shite mimuka
金魚 urenokoru mizu wo ninahi te kingyo uri
柿 kaki tawawa tsuma no egao wo ryouyaku ni

designed by Asuka

訪戴



山田六甲

霜の夜の星を掬ひに摩耶夫人
猫舌の女と年を忘れけり
極月の柱に当ててメモをとる
寝正月いま人間になる途中
鍋奉行有馬守と名乗りけり
書初めの筆動かさば申の貌

穴を描き穴の向うの寒つばき
寒の鯉らしくしなさい鼻眼鏡
七草やぱりぱりサラダ長寿蔵
いろいろと居て鴨一色の寺田池
恵方とは今天狼の下あたり
大寒やジャズの匂ひのする句集
大寒やメール届いたかと電話
山茶花と見るか冬椿と見るか
女湯の湯気がぼうぼう雪の山
薄氷に青い鉛筆ささりゐる

六卿集

RIKUKESHU

(五十首順送り)

返り花

二瓶洋子

己が影いとしと思ふ十三夜
山門を入りて鈴生り大銀杏
禅寺の花も実もある茶垣かな
高き樹に鶉の声して一羽発つ
「もしもし」とは携帯の人返り花

虎魚

松山律子

年改ってラデッキー行進曲
裸婦はみな豊満街灯さむざむと
生きてゆく途中どかんと冬の山
豆を撒くフラクタールの息子たち
虎魚 笑ったときはどんな顔

鶯

中村房枝

綿虫や堀めぐらして宗家なる
水雪の加賀や蕎麦湯に間のありて
振り向けば見送られをり春の雪
十二支をはづれし猫の孕みゐる
来てをりぬ鶯色の鶯が

舞楽面

鳴海清美

鶯の声の真ん中表坂
二の丸に赤帽白帽鶯の晴
秋袷髪の捉ふる風の筋
秋薔薇三本四畳半の明
身に入むや舌を出したる舞楽面

「もしもし」とは携帯の人返り花 二瓶洋子

己が影いとしと思ふ十三夜

山門を入りて鈴生り大銀杏

禅寺の花も実もある茶垣かな

高き樹に鶉の声して一羽発つ

呼びかけられたのかと振り向いたら、自分にはなくて、携帯電話と話している人がいて、気恥ずかしさに目を移すと「返り花」が咲いていた。気恥ずかしさをそらす洒落で、「振り返り花」という匂いが利かしてある。茶垣の句でも「花も実も」が実景でありながら言葉遊びをしてみせている。俳句には言葉遊びの要素も必要なのだ。

橙木集

同人自選

順不同

尾瀬沼

松本文一郎

木道の先は尾瀬沼草紅葉

早寝覚炉火の恋しき湖畔宿

利き酒やビルの狭間の十三夜

秋灯下待ち行列の弁当屋

秋の声ふと振返る切通し

草堂斬西無樹林

非子誰復見幽心

小鳥来る

三井 孝子

飽聞橙木三年大

小鳥来る靴に慣れずにすぐ這ふ子

与到溪辺十畝陰

音の無き午後鶏頭の輝やけり
海を恋ひ揺れて波なる秋桜

杜甫

店先の花に佇ずむ秋思かな

寒月を愛でし煙草の口実に

六花集

中谷喜美子

会員自選

秋の雲塩胡椒して喰ふと云ふ
紙皿に食ひ余りたる子持鮎
菊花展遠巻きにして下校の子
夕紅葉つなぐ言葉のみあたらず
唐突に銀杏並木の途切れたる

横山 迪子

平居 滯子

秋雨や生命あがなふ脚一本
地虫く断脚の猫ただ眠る
秋高し手術待つ日の誕生日
秋晴れやプーさん電報病室に
山茶花と猫の迎へる退院日

地に描く子等の未来凶天高し
大坂の渋滞はげし文化の日
朴落葉命の気配漂はせ
もみぢ葉の栞れる本を借りにけり
縫ひ合す端布と会話する夜長

延川五十昭

佐原 正子

僧堂の雨にうたるゝ紅葉かな
雲水のもみぢ葉ふみし足の裏
枯蓮に鷺立ちつくす日暮かな
仏師彫る槌の音遠く菊の庭
山風に吹き重なりぬ破芭蕉

白墀に紅葉の映る虚空蔵尊
山間に紅葉の舞ふ日夢二の碑
さはやかや風の只見の屋形船
何もかも透明な日よ十三夜
朝霧を通り過ぎたる蕎麦街道

永田 勇

菊谷 潔

鱗雲釣糸からみ寄る女
長き夜や閉ぢて久しき本を読む
秋風や口では言へぬ文読めり
紅葉狩葉つばの器に酒を酌む
五人衆紅葉の中の湯に浸る

掃きつかれ見上ぐる枝の紅葉かな
夕映や遊行の果てに出会ふ秋
庭先に鳥の来ぬ日のひなたぼこ
来しかたに涙のにじむ赤とんぼ
吊柿下から順に姿消し

ええのう



六甲

山茶花と猫の迎へる退院日
横山 迫子

横山さんの作品には猫と作者は深い親子のつながりのようなものが伺える。従って猫が主語になった句や作者が主語になったような、つまり猫と本人が一体化しているように

思えるのである。「猫可愛がり」という言葉があるように、我が家でも猫が主人で私なんぞ添え物のように扱われているから、家出してやろうと何度考えたことか。射場は我が家に来れば露骨に猫可愛がりする家内を軽蔑するのである（私も密かに…）。

付け加えれば、白猫のいる我が家では黒い服をうかうか着ることが出来ないのだ。

紙皿に食ひ余りたる子持鮎 中谷喜美子

「落鮎」が基本季語で、傍題として「鏝鮎」「渋鮎」「下り鮎」「秋の鮎」などを使うが、「子持鮎」も秋の鮎である。

腹一杯に子をはらんだ贅沢な食べ物でありながら、作者は紙皿でもって食したのである。しかも食べ余しているほどここでは豊富に捕れるのである。紙皿に野趣味が感じられて美味しそうだ。「罰当たり者めがー」という天の声が聞こえて来そうだ。「喰ひ余し」ではなく「余り」に客観性が見られるのが良い。（以下略）